
愛しているといわないで

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

愛しているといわないで

【Nコード】

N2851C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

子供の頃のトラウマで、うまく感情をあらわすことのできない少年・凧。彼は恋人の和也のおかげで、少しずつ、感情を取りもどし始めていた。そんなある日、凧は戻りたくもない実家に呼び戻されるのだが

愛しているといわないで

赤、だ。血の。

彼はただ見ていた。ベッドの下で、息を殺し震えながら。

彼と同じ顔をした子供の肩から、血が流れ出している。白い肌を彩る、紅。青いＴシャツをどす黒く染めていく。

子供は怯えてはいない。包丁を逆手に持ち、腕を振り上げた母を見つめている。

一方母は、いつもと同じように穏やかな微笑みを浮かべていた。いつもと違うところといえば、白いワンピースに散った赤いしみくらいだ。

「愛しているわ。ねえ、海。あなたはわかってくれるでしょう？」

母の声は優しい。けれどもとても禍々しい。

いつもと変わらないのに。いや、それだからこそ。

子供はあとずさる。ぎこちない動作で、逃げ出そうとする。

母が子供の肩をつかんだ。その胸に包丁を振り下ろす。

血がしぶく。白いワンピースにまた、しみが増える。

子供は悲鳴を上げた。母は黙らせもしないで、子供を床に押し倒す。

何度も胸に包丁を突きたてると、あふれた血が床を汚した。母は返り血で凄惨なありさまになっている。

子供は苦悶の表情を浮かべている。もう悲鳴は聞こえない。子供の口から血泡が噴き出す。

「愛しているのよ……」

母は子供の腹を裂く。赤黒い液体が散る。そして流れる。裂けめからピンク色をしたものが出てくる。

あの子はもう、助からないだろう。彼にさえわかった。

母は立ち上がり包丁を首に当てる。横に引く。

赤い赤いものが飛ぶ。白い壁が赤く染まる。それは彼をも汚した。

母がくずおれる。子供に折り重なって倒れる。彼は生温かい感触が額を伝うのを感じた。無意識に手で拭う。その手を見て彼は息をのんだ。血だ。母の首から噴き出した血。ぬるりとしたそれは、まるで作りものめいていた。彼は叫んだ。のどが痛んだが、気にならなかった。叫べば、まわりつくこの血臭が消えてくれるのだとも言わんばかりに、声を上げつづけた。結局、血臭は今もまだ消えていない。

ひととき大きな揺れに襲われて、有村凧は目を覚ました。まだ、頭がはつきりしない。ここはいつたいどこだろう。

「どうかした？ うなされてたけど……」
横から声がかかる。手が伸びてきて、凧の額にハンカチを当てた。そこでやっと、凧は思い出した。ここは電車の中で、自分は実家に戻る途中だった。

よくよく見ると、目に映るものは電車の内装以外のなにものでもない。身体の下にあるのは、はんぱにやわらかいシートだ。

凧は顔だけを横に向けた。眉を寄せて、松前和也が凧を見つめている。

「……なんでもない」

答えながら、凧は自分に言い聞かせていた。なんでもない。大丈夫なのだ。あれはただの夢で、本当はもう過ぎ去ってしまったことなのだから。

「なら、いいけど」
納得しきっていない表情だったが、和也は追及しては来なかった。一年近くの付き合いの中で育まれたこの距離感を、凧は心地いいと思う。

和也を見ながら凧は笑った。和也の外見も内面も、凧には好まし

く感じられる。

彼の涼やかな目許が好きだ。緑がかつた瞳もきれいだと思う。薄いくちびるがつむぐ言葉はいつも優しい。キスをするとき頬に触れる、硬質の髪もいとおしい。

「疲れてる？ 昨日、無理させすぎたかな」

ハンカチの代わりに、大きな手が額に乗せられる。和也の手はひんやりと冷たい。

「誘ったのは僕だ。気にするな」

言ったとき、電車が揺れた。腰が痛んだ。

たしかに、少し求めすぎたかもしれない。和也のひきしまった身体を思い出しながら、凧は思う。

照れくさくなって、凧は視線をずらした。薄汚れた窓に、凧の姿が映っている。

肌は白く、くちびるは紅い。扇型のまつげに縁取られた瞳は、闇と同じ色をしている。眉は整えてもいないのに細く、弓型だ。

その少女めいた面差を包むように、真っ直ぐの漆黒の髪が流れている。切りそろえられた毛先は、背まで届いていた。

「なにか面白いものでもある？」

「いや、別に」

つい観察してしまつたが、自分の容姿など面白いものではない。

和也はよく凧を誉めるが、それは《あばたまえくぼ》というやつだ。男としては、この少女めいた容貌も、小柄できゃしゃな身体つきも、マイナスではない。

今度は、本当に窓の外を眺めた。

空はどこまでも青く澄んでいる。雲はない。田植え前の田や、まだ寂しい山が目についた。

春とはいえ、この辺りではまだ冬の気配が残っている。

「こんな辺鄙なところに住んでるんだ？ 実業家なのに」

都会育ちの和也には、この程度でも相当のいなかに見えるらしい。凧は苦笑した。凧の実家は、もつと奥にあるのだ。

「近頃は交通手段も発達しているからな。それにあいつは、いくつも別宅を持っている」

凧は吐き捨てるように言った。

「潔癖なんだから」

「……あいつが嫌いなだけだ」

その、あいつのいるところに近づいているのかと思つと、凧は胸の辺りがむかついて仕方がなかった。

凧と和也は、終点で電車を降りた。降りたのはふたりだけだった。駅は小さく、古びていて、駅員もひとりしかいない。

「寂しいところだね……」

和也がつぶやいた。和也は、自分の荷物だけでなく、凧の荷物も持っている。

「あと三日で、普通の学校なら新学期がはじまるからな。だからだろっ」

答えてやりながら、凧は和也を従えて駅を出る。

田園風景の中、男がひとり立っていた。チャコールグレイのスーツ姿で、風景にはあからさまにそぐわない。

まだ若いが、風格のようなものをただよわせている。それなのに、自己主張を感じさせないのが妙だった。

「お迎えに上がりました」

男はうやうやしく頭を下げる。

「武藤か」

凧は男を一瞥した。

「知り合い？」

和也がささやいてくる。凧はうなずいた。

「あいつの秘書だ」

「どつぞこちらへ」

凧の言葉が聞こえているはずなのに、武藤は涼しい顔をしている。責務に忠実に、凧を招く。

「気を許すな。あいつも敵だ」

応じながら、凧は断言した。

凧はベッドに横になって、天井を見上げていた。家に入ったところからずっと、頭が痛かったのだ。

隣の部屋には和也がいるが、呼びつけるのも気がひけて、こうして痛みに耐えているのだった。この家にいる間は、和也以外の誰にも気は許せない。

「凧、入るよ」

と、隣室と凧のいる部屋とをつなぐドアが開いた。和也が顔を出す。

「言ったら悪いけど、変なところだね、ここって。客室と私室が隣同士だなんて、落ち着かないんじゃない」

「ここは客室だ」

ドアをつしる手に閉めて寄ってくる和也に向かって、凧は教えてやった。

「え？」

和也を差し招き、ベッドのふちに座らせる。そして寝そべったまま、凧は口を開いた。

「ここには僕の部屋はない」

「……悪いこと聞いたかな」

和也は気まずそうに鼻の頭をかいている。

「いや。それより頼みがある」

凧はめがねをはずした。それをベッドスタンドのわきに置き、上体を起こす。

「頭が痛いんだ……だから」

抱いてくれ、と。凧はくちびるの動きだけで伝える。

多分この頭痛は、精神的なものだ。和也と肌をあわせれば、忘れられるような気がした。

「でも、誰かが来たら大変なことになるよ」

「鍵くらいかけてある」

吐息混じりにささやいて、凧は和也の胸に頬を寄せた。片手は背にまわし、もう一方の手でシャツのボタンをはずしていく。

あらわになった鎖骨に舌をはわせようとしたそのとき、顔を上げさせられた。

強引に、口づけられる。

口腔を激しく荒らされて、凧はあえいだ。気づけばシャツは脱がされていて、床の上で丸まっている。

凧はそつと横たえられた。和也が覆いかぶさってくる。

和也は凧の下着をまくり上げ、胸の突起に舌先で触れる。凧は身を震わせた。

和也の舌や歯になぶられ、凧は甘い痺れを感じる。一年たらずでここまで感じやすくなるなんて、淫らな身体だ、と凧は思う。

和也が唾液をのむ音が聞こえた。吐息が優しく肌をくすぐる。硬く尖った底を、和也は執拗にねぶる。凧は和也の頭に手を添えた。ぱさぱさとした、やわらかい髪が指にからむ。

和也は熱を帯び色づいた突起には満足したらしく、もう片方を口に含んだ。音を立てて吸う。

その音はひどく淫猥に響いた。凧は頬が熱くなるのを感じる。

「別に……なにも出ない……」

あえぎ声の合間に凧はささやいた。

顔を上げると、和也が口許をほころばせる。

「照れなくてもいいのに」

「そんなこと……」

否定したものの、赤面しているのは隠せない。

いつまでも、慣れない。誘うのはいつも凧の方だが、こうして理

性が残っているうちは、されることすべてが恥ずかしくてたまらない。

「凧は本当に可愛い」

和也が腰をつかんできた。凧は身をこわばらせる。

くちびるはへそに降りた。浅いくぼみに、和也の舌が差し込まれる。

「んっ……」

凧はシートをつかんだ。シート越しに、自分のてのひらに爪をたてる。

痛みが、凧をこちら側につなぎとめている。こうしていないと、流されてしまいそうだった。

あんなところをなめられて感じてしまうなんて、と凧は思う。自分はおかしいのかもしれない。

口の中、首筋、うなじ、鎖骨　この身体は性感帯だらけだ。

「そこは……も……」

凧は首を横に振った。目の端には涙がにじんでいる。

「せっかちなあ……。ねえ凧、欲しいなら、自分で脱いでごらん？」

和也が凧から離れる。凧も起き上がる。

凧はほとんど上半身裸なのに対して、和也はシャツのボタンがいくつかはずれているだけだった。不公平な気がして、凧はまくり上げられた下着を下ろした。

「もったいない」

一度ベッドに入ってしまったと、和也の性格はかなり変わる。変わる、というのは正しくないかもしれない。ただ、優しく凧を抱くのだが、そのときに恥ずかしいかっこうをさせたり恥ずかしいことを言わせたりするのだ。

凧はズボンのホックに手をかけた。和也はじっとそのさまを見ている。

考えてみると、これは相当に恥ずかしい行為だ。和也が欲しくて

たまらないのだと、口にするに等しい。

痛いほどの視線を感じながら、凧はファスナーを下ろした。脱いだズボンは床へと放る。

ズボンがなくなると、下着の中で頭をもたげはじめていたものが、少し楽になる。トランクスだから、それほど締めつけはきつくはない。

「全部脱いで」

命じられ、凧は膝立ちになった。ゆっくりとトランクスを下ろしていく。

膝のあたりまで下ろしたところで、和也が凧に手を伸ばしてきた。優しくこする。

そして顔を寄せ、舌先で、先端ににじんできた液をすくう。

「ひっ……ん」

和也の骨ばった大きな手と、やわらかく少しざらついた舌が、凧を昂ぶらせる。膝立ちになっていられなくて、凧はへたり込んだ。

「このままじゃうしろは可愛がってあげられないから、四つんばいになって腰を高く上げて」

「待って……。和也も、服、脱いで」

自分だけが裸で、しかもうしろからなんて、いやだった。まるで、それだけの関係であるかのような、そんな気がして。

「いいよ」

和也は凧のしている前で、シャツを脱ぎ捨てた。下着もズボンも脱ぎ、あつというまに裸になる。和也は、凧に裸体を見せることにためらいはないようだった。

和也の身体には、きっちり筋肉がついている。少し日に焼けた身体を、凧はうっとり見つめた。とうに立ち上がっているものも含めて、身体中にキスしたい、と思った。

凧は四つんばいになって、腰を高く上げる。深呼吸をしながら待ったが、動悸はおさまらなかつた。

吐息が秘所をくすぐる。舌がねじ込まれた。

ぴちゃぴちゃと、猫がミルクをなめるような音がする。できるだ

け奥まで、唾液をぬり込め、ほぐそうとしているようだった。

凧は声がもれないように指を噛んだ。今、口を開いたら、早く、とねだつてしまいたいそうだった。

「や……」

舌が外に出ていくとき、凧は切なく声を上げた。

けれどもすぐ、なにかが侵入してくる。凧はとっさに、きつく締めつけた。

「指だよ。あんまり、ひくひくもの欲しそうにしてたから……。あんまり締めつけないで、痛いよ」

言いながら、和也が指を円を描くように動かす。

「ふっ……あ、っ……」

凧の背を快感が駆けぬけた。指を噛んだくらいではこらえきれず、あえいでしまう。

「我慢しないで。ほら、いいんでしょ？」

圧迫感が増える。指が増やされたらしい。

身の内側にあると、目で見たときよりも太いように感じる。二本の指にこねくりまわされて、凧は背を弓なりにそらせた。

「指だけでもいけそうだね。もう一本、増やそうか」

また内側から広げられる。それだけでも気持ちよくはあったが、なんとなく、ものたりなかった。触れてほしいのは、もっと深いところなのだ。

「あ……もつと、和也っ……」

「まだたりないの？ もう指、三本も入ってるのに……。四本目も入れてほしい？ それとも違うのが、いい？」

「和也の……ん、あ……入れっ……ふあ……」

中で動く和也の指を、ひどくリアルに感じていた。けれどもまだたりなくて、凧は求める。

「息、吐いて……。今、入れてあげようね」

指が、参本同じに引き抜かれる。それを寂しいと思う間もなく、後孔に熱いものが押し当てられた。

凧が息を吐くのにあわせて、それは中へと入っていく。圧迫感は、指とは比べものにならない。後孔が引きつれるように痛んだ。

「もう、全部入ってる。どんな感じがする？」

凧の腰に手を添え、和也が言った。

「ばか……言わせるな、そんな……こと」

和也は動きもせず、凧の言葉を待っている。凧はくちびるを噛んだ。

「そんなに恥ずかしい？ それとも、気持ちよくない？」

和也が背中から覆いかぶさってきた。凧は耳元でその言葉を聞く。

「あつ……んく……」

挿入の角度が変わって、内壁がすられる。凧はうめいた。

和也とつながっている部分が熱くてたまらない。ひどく敏感になっ
っていた。

背中が、和也の肌と触れあっているからかもしれない。和也はど
こも熱い。

「わかってるくせに……」

凧は身じろぎした。和也に押さえ込まれているようになかった。こ
うなので、これだけでも精いっぱいだ。

けれど、凧の呼吸は早くなる。それほどまでに敏感になっている。
「気持ちいいなら、そう言えればいいのに」

和也が凧の最奥を突く。

「ひ……っ、あ……」

痛みを感じて凧はあえいだ。内臓をこねくりまわされるような不
快感、そして意識が飛んでしまいそうなほどの陶酔も一緒だった。

和也が凧を突き上げるたび、いやらしい音が響く。とろけそうに
熱いつながった部分は、ふたりの蜜でぐしょ濡れだった。

「凧のここ……いいよ。すごく。やわらかくって、狭くて……。こ
んなに濡らして、凧も気持ちがいいの？」

和也の手が、はちきれんばかりの凧のものに手を触れた。先端の
孔を指でひっかく。

「半分は……おまえのっ……」

どうしても声が震えてしまう。凧は、両方を同時に攻められると弱い。

「ん……あ、はあ、ん、あ……も……出るっ……」

凧の身体が痙攣した。先端から勢いよく液体が噴き出す。

凧は脱力した。シートに頬をつけ、荒く息をつく。

放出の余韻にひたる敏感になった身体を、和也が激しく攻めたてる。凧は和也のなすがまま、快楽をむさぼった。

和也が凧の中で震えた。押し殺したようなうめきが聞こえる。

熱いものが凧の奥へと注がれた。それは潮のように広がり、凧の体温と同化した。

「好きだよ、凧」

「……好きだなんて言うな」

凧は冷めた声音で応じた。

甘い気分もいっぺんで醒めてしまった。

どうして、軽々しく好きだなんて言えるのだろうか、と凧は思う。

愛しているとか好きだとか、そういう言葉は特別なのだ。口にするたび愛情の目減りしていく言葉だ。

もちろん、凧も和也が好きだ。けれども、ずっと一緒にいたいから、好きだなんて口にはしない。

それなのに。

和也はわかっていない。だから簡単に言ってしまう。

「……ごめん」

和也のくちびるがうなじに触れた。凧は少しだけ、機嫌を直す。

「ごめんね。……疲れた？」

和也が凧の中から出ていく。和也は凧の横に寝そべった。

凧は和也の胸に頬を寄せる。ゆったりとした心音を聞くのが、凧は好きだ。その音は、凧を気だるい眠りへと誘う。

「……寝る」

宣言して、凧は目にふたをした。もう、頭は痛くなかった。

「凧……起きて。夕食だって」

しつこく揺さぶられて、凧は仕方なく目を開けた。

「夕食？」

「うん、話はそのときにするって」

「……なにも食べたたくない。あいつの顔を見ながら食事なんてできない」

凧は起き上がった。寝乱れた髪を手で梳く。

「実の父親に対して、そういうこと言うのはよくないよ」

「あんなやつ、父親なんかじゃない」

「凧。なにがあつたのか、俺は知らないよ。だから無責任に聞こえるかもしれないけど、どんなことがあつても、それは言つたらいけないと思う」

学校でよく見せる、優等生然とした顔で和也は言いきる。凧は軽く舌打ちした。

本当に、和也はなにもわかっていない。

母親が凧の双子の弟を殺して自殺したのが、父親のせいだったと知つたら。

はたして、和也は同じことを言えるだろうか。

「おまえにわからない」

思いがけず強い調子になつてしまつて、凧は自分で驚いた。

「たしかに、そうだね」

答える和也の声は暗く沈んでいる。凧は鼻の奥がつんとするのを感じた。

そんな顔をされたら、凧はなにも断れない。

「いいよ。行けばいいんだろ」

結局、凧はこれでけっこう和也に惚れているのだった。

凧は、腹立たしく思いながらスープを口にはこんでいた。

スープの味は悪くない。ヴィシソワーズなんて食べるのは久しぶりだが、以前食べたものよりも好みにあっているようだ。

けれど、凧は父・伸夫の態度が気に入らなかつた。伸夫も、義母の由香里も、ひとことも口をきこうとしないのだ。自分たちから呼びつけておいてどういうことだ、と凧は憤っているのだった。

時折、場をなごませようとしてか和也が冗談らしきことを言うのだが、伸夫も由香里も反応しない。かわいそうだが、凧も笑ってやれるような気分ではなかつた。

凧は伸夫と由香里に目をやった。

伸夫は怒つたような顔で、バターをぬつたパンを口にしてている。

白髪が増え、皮もたるんできている伸夫は、今のところ食事以外の用途に口を使う気はなさそうだ。

由香里も同様だった。まだ若い彼女は、けばけばしい化粧が落ちないようにか、お上品に食事をしている。

吐き気をもよおして、凧は口許に手を当てて和也を見た。

ぎこちなくナイフとフォークを使っていた和也は、凧の視線に気づくと目だけ笑ませる。

それだけで、吐き気はおさまる。凧はすぐにでも和也にキスしたい気分だった。けれどもこらえ、微笑むにとどめる。

「凧」

それからしばらくたって、伸夫が口を開いた。凧は返事をせず、伸夫をにらんだ。

「おまえを呼んだのはほかでもない、見合いのためだ」

凧は目をしばたかかせた。いつたい、なにを言いだすのだろう、と。

「見合い？」

聞き間違いではないかと、問い返す。予想に反して、伸夫は首肯

した。

「そつだ。取引先の社長令嬢で、年はおまえのひとつ下。いい話だろつ」

「ふざけるな」

つまりは、政略結婚、なのだろう。時代錯誤もはなはだしい。

しかも、ずっと放つたらかしにしておいて。今さらだ。

勝手にそんなことを決められて、ありがたがる馬鹿がどこにいろだろう。

「凧さん、あちらのお嬢さまは、それはそれはいい方なの。わたくしも、悪いお話じゃないと思うわ」

「他人にそんなことを言われる筋合いはない」

凧はきっぱりと言い放つた。

由香里は真つ赤なくちびるを噛み、押し黙る。

「凧」

和也がたしなめるような声を出した。けれども凧は首を振る。

いくら和也に言われたとしても、これだけは退くわけにはいかなかった。

母が死んだ遠因なのだから。由香里は。

「従つつもりはない」

凧は和也に目配せして、席を立った。手をついたテーブルが揺れる。

「人の話は最後まで聞け。これはもう、決定事項だ。その男とも別れてもらつ」

「和也はただの友人だ」

当の和也がなにか言つより先に、凧は言った。

和也は嘘のつける人柄ではないから、しゃべらせるわけにはいかなかった。必ずぼろが出るに違いないからだ。

「もう、調べはついている。証拠もある」

伸夫は封筒を差し出した。凧はそれをひったくり、中をのぞく。中には写真が数枚、入っていた。

和也にまたがりのど首をそらす風、壁に手をつき片足を持ち上げられ挿入されている風。どれも、風と和也が肌をあわせているところを撮影したものだ。た。

望遠レンズを使ったのか、どれも鮮明で、ひとめで風と和也だとわかる。

住んでいる部屋が四階だからと、油断していたのが悪かった。これからは、寝室のカーテンは閉めておこう、と風は誓う。

「別れる気はない」

開き直り、風は胸を張った。

和也と別れるなんてこと、風には考えられなかった。

和也がいなければ生きていられない、とは思わない。けれども心は死んでしまふに違いない。

「俺も、別れる気はありません」

和也が風の肩に触れる。温かい、手だ。

心持ち和也に寄りかかり、風は安堵した。「和也さんも、風さんを慕ってくださるのは嬉しいですけど、このことをご両親が知ったらどうなりますでしょうね」

やわらかく、由香里が言う。

「それは脅迫ですか？」

「どう取ってくださってもかまいませんわ」

「卑劣な方ですね。脅しても効きませんよ」

そうは言っているものの、和也の声は震えている。怒りもあるだろうが、あせりの方が大きいように思えた。

「風も、男の味が忘れられないなら、代わりに用意してもいい。だが、それが外部の人間では困る」

「不要だ」

和也以外の男に抱かれるなど、今の風には考えられなかった。

なにもかもがいとおしいのは、和也だからなのだ。昔は多くの男に抱かれましたが、それは過去のこと。今は和也しかいらぬ。「とにかく、明日、帰らせてもらう。なんでも勝手にすればいい。」

僕はもう、有村の家には関わりたくない」
「待て！」

今度は凧も待たなかった。和也の手を引き、凧は食堂をあとにした。

まったく、不愉快だ。

隠し撮りされた写真を見ながら、凧は思った。こんなものは処分してしまわなくてはならない。凧には露出狂のケはないのだ。

写真を机の上に放り出し、凧は伸びをした。

細工をされた形跡がないか調べていたのだが、どれも本物らしいとわかったただけだった。

時計を見ると、もう十時をまわっている。普段なら、そろそろベツドに入る頃合だ。

凧はドアに鍵がかかっているのをたしかめて、ベツドにもぐり込んだ。

慣れない旅や、昼間から和也と抱きあったことのせいで疲れている。眠気はすぐにやってきた。

カチャリ。

鍵がはずされる音がした。

ドアがゆっくり開く。何者かが侵入してきたようだった。

大声を出せば、和也に聞こえるだろうか。息を吸い込んだとき、口をふさがれた。

「お静かになさってください。手荒なまねはしたくありません」

耳もとでささやかれた声は、まぎれもなく武藤のものだった。凧は身をよじり、顔を確認する。たしかに武藤だ。

「これも命令です。お許しください」

ああ。やはり。

伸夫は凧を、懐柔するつもりなのだ。武藤を使って。

昔から人の気持ちなど考えないような男だったが、どれだけ風を傷つければ気がすむのだろう。

母が亡くなつたのも、あの男のせいなのだ。空虚な言葉が、徐々に、母を狂わせて 凶行を起こさせた。風はそう信じて疑わない。うなじにキスが落とされて、風は現実には引き戻される。パジャマのボタンがはずされていく。

風は手足をばたつかせた。けれども武藤はびくともしない。

武藤の手が、素肌と下着の間にすべり込んでくる。冷たい手の感触、そのおぞましさに風は身を震わせた。

「やめろ……！」

風は叫ぶ。もがく。

武藤はやんわりと、それを押さえ込む。

「大声を出しても誰も助けには来ませんよ。和也さんにも、眠っていただいています」

「和也になにをした……！」

「よく眠れるように薬を差し上げただけです」

武藤は特に悪いことをしたとは思っていないようだった。その手が、風の肌をなぞりながら、ついに下腹へとたどりつく。

優しく扱かれて、風は身体が熱くなるのを感じた。

「んっ……」

声がかもれる。涙もこぼれた。

こんな男の手で、感じたくななどないのに。

風は歯をくいしばった。もう、涙も声も出すものかと思った。

「我慢なさらなくともよろしいのですよ」

武藤の手は優しい。和也と比べてさえ。

大人、なのだろう。風よりも和也よりも。

だから風は翻弄される。望みもしないのに身体の熱は上がっていく。

身体の熱が上がるにつれ、風の心は冷えていった。

氷よりも、なによりも冷たく。

「そんなの、納得できません！」

まどろみを裂いて、和也の声が聞こえてきた。凧は身じろぎして、起き上がる。

身体がだるくて仕方がない。しかも、やけに窮屈だ。

見ると、凧は服を着ていなかった。しかも、手足は布で縛られている。

叫ぼうとしても声が出ない。猿轡を噛ませられていた。

「凧様はお会いしたくないそうです。おひとりでお帰りください、とのことです」

武藤の声もする。

だんだん、思考がクリアになってきた。凧は頭を振って、まどろみを追い出す。

そうだった。昨日、凧は武藤に犯されたのだ。昼に、和也と睦みあつたこのベッドで。

今、外ではなにか起こっているのだろう。凧は耳をそばだてた。

「そんなこと、凧が言はずありません」

和也が強い調子で言っている。

「事実です」

返す武藤の声は冷静だ。

「なら、凧に会わせてください。本人に直に聞きます」

「凧様は、顔も見たくないそうです。もともと身体だけの関係だったのだから、もう関わらないでくれ、と」

「嘘です！」

和也の声は、まるで悲鳴のようだった。

「凧とは、決して、身体だけの関係なんかじゃありませんでした」

「そう思い込んでいるだけではありませんでしょうか。凧様は、あなたからの愛の言葉を拒んではいらっしやいませんでしたか？」

沈黙。

和也は答えられないらしかった。

凧がそういつた言葉を嫌うのは、事実だったので。その理由を説明したことはなかった。

凧は悔やんだ。もしも今声が出せるなら、すべてを説明したかった。今まで言えなかったこともすべて。

和也を失うことに比べれば、それくらい、大したことではなかった。

「わかりました。失礼します」

行かないで、と凧は心の中で叫んだ。

どうして、自分は動けないのだろう。和也を追って行きたいのに！凧がイモムシのように身体をくねらせていると、扉が開いて、武藤が戻ってきた。凧とは対称的に、一分の隙もなくスーツを着込んでいる。

「起きていらつしやいましたか」

武藤は近寄ってきて、凧の猿轡をはずす。

「和也は……！」

「お帰りいただきました」

武藤が最終通告をつきつける。凧はうなだれた。手足をいましめる布を、武藤ははずしはじめる。腕が自由になり、足が自由になっても、凧はそのままだった。

服を着せようとする武藤に対し、凧は唐突にこぶしを振り上げる。「ふざけるな……！」

涙がにじんだ。凧は武藤の顔といわず胸といわず、やみくもに殴りつけた。

「凧様、お静かになさってください」

武藤が凧の腕をつかむ。凧は腕に軽い痛みをおぼえた。力が抜ける。意識が、遠のく。

「武藤……なにを……」

「精神安定剤です。ゆっくりお休みください」

風は呪詛の言葉を吐こうとして、けれどもかなわずに、気を失った。

「ぎ、風……」

目の前で、和也が微笑んでいる。

ああ、戻ってきてくれたんだ。風は思う。けれども、そんなわけはないのだと、同時に風は知っている。

和也はもう行ってしまった。帰ってこない。

「起きて……」

もう、起きている。それなのに、どうして和也はそんなことを言うんだろう？

思ったとき、くちびるにやわらかく熱いものが触れた。

しつとりとあたたかいそれは、風の心を優しくほぐしていく。

「ん……和也……」

風が目を開けると、和也がいた。

まだ、夢を見ているのかもしれない。夢なら醒めないでほしいと、風は和也の首に腕をまわした。

「して……」

夢の中できこえたら、なにも恥ずかしいことはなかった。風はパジャマを脱ぎ捨てて下着姿になる。

空気が冷たく肌を刺した。窓を見ると、夜空が長方形に切り取られていた。窓は開いていて、風が吹き込んできている。

リアルな夢だ。それだけ和也が恋しいのかもしれない、と風は思った。

「どうしたの？ 媚薬でものまされた？」

夢は都合がいいものはずなのに、和也はいぶかしげな顔をしている。

凧はすぐにも抱いてほしいと思っているのに。和也の腕にもたれて、武藤を忘れてしまいたいのに。

「それとも、まだ寝ぼけてるの？」

和也が凧に口づける。凧は自分からくちびるを開いて、和也の舌を迎えた。

いつもよりも執拗に、和也は凧の口腔を探った。息をするのも忘れて、凧は酔いしれた。

あごに、のみきれなかった唾液がたう。凧はそれでも、和也を放さなかった。

「目は、覚めた？」

そっとくちびるを離し、和也は首を傾げた。

「夢じゃ、ない……？」

ようやく、凧は気がついた。和也は、今、目の前にいるのだ。夢でもにせものでもない。

とたんに、凧は恥ずかしくなった。凧は、下着姿で、浅ましくも和也に求めたのだ。

頭に血がのぼるのを感じた。凧は、和也の胸に顔を押し当てる。

「そんなに恋しかった？」

和也の不埒な手が、凧のトランクスに手をかける。その中の、昨夜さんざん武藤になぶられたものに、指先が触った。

「俺はすごく恋しかった。こうやって、凧に触れたくて仕方なかった」

ならされてもいないそこは、あっさりと指の侵入を許す。

「あっ……」

内部をかきまわされて、凧はあえぎ声をもらした。

「こんなふうだから、身体だけの関係なんて言われたのかな」

「そんなこと……あ、やめるな……」

出ていこうとする指を、凧は締めつけた。

「あとで全部説明するから……」

凧は腰を浮かせ、先をうながした。和也のもう片方の手が、トランスを脱がせ、肌着をはぎ取る。

「じゃあ、少しだけ。今日は最後までやらないからね」

和也の指が出ていった。今度は凧も拒まない。

凧はあおむけになった。腰の下にまくらを入れられる。

「うしろも前も、これで全部見えるよ。どっちから可愛がってほしい？」

足を左右に開かされた。凧は、半分立ち上がったものも、ひくつ後孔も、すべてさらされているのを感じる。

「どっちでも、いい」

凧の声は情欲にかすれている。

和也は笑って、凧のものに指をからめた。日に焼けた指がからみつくさまが、凧からもよく見えた。

そして、和也は口を開けて、凧のものをくわえる。あたたかい粘膜が凧を包んだ。

こうしてしゃぶられるのは、どれくらいぶりだろう。凧はわずかに腰を浮かせながら、思う。

和也は一心不乱に凧のものをなめている。もう完全に立ち上がったそれがのどの奥に当たるたび、和也は苦しげに顔を歪めた。

「あ……ん、ふ……」

和也の口からもれた唾液と、凧のこぼした蜜とで、後孔は濡れそぼっている。そこに、和也の指が二本、強引に差し込まれた。

「や……あっ……！」

和也の指はすぐに、凧のいいところを探り当てる。そこを何度も刺激され、凧は身体を跳ねさせた。

そうして、ひととき強く吸われ、凧はあっけなく達した。

和也のどが鳴る音が、やけに大きく聞こえる。顔を上げた和也の口の端から、白濁とした液がたれているのを見て、凧はどきりとした。あまりにも、生々しい。

和也は口許をハンカチで拭った。そのあと、凧から抜いた指も拭く。

「悪い。まずかったら……？」

起き上がり、服を引き寄せながら凧は言った。

「全然。ちよつと苦かったけどおいしかったよ」

「ばか」

臆面もなく言われて、凧はうつむいた。もしかしたら、優等生には厚顔であること、なんて条件があるのではないかと思えてくる。

「ばかでもいいよ。それで、なにがあったの？」

「昨日の夜、武藤に力づくでやられた。それで、朝、目が覚めたら、手足は縛られてるし猿轡はかまされてるしで……」

「ひどいね。犯罪だよ。訴えようか？」

「いや。面倒だ」

「でもそれじゃ、俺の気がすまないよ。どこまでされたの？ 挿れられた？」

「……あんまり露骨に言うなよ」

「ほかに言いようがないよ。で、どうなの？」

和也の剣幕に、凧は何度も首を振る。首振り人形にでもなった気分だった。

「そう……。予定変更だね。今日も可愛がってあげる、たつぷり」

「そんなにむきになるなよ」

「むきにならないでいられるわけないだろ！」

「単に……武藤はあいつの命令に従っただけだ。あいつ、本当に僕に男をあてがう気だったらしい」

「許せないものは許せないんだ……」

和也が、せっかく着たのに、凧の服を一枚一枚はぎ取っていく。

凧は抵抗しなかった。

和也の好きなようにさせてやりたかったのだ。

こんなにも、怒ってくれている。それが嬉しかった。

独占欲を隠そうともしない和也を見てみると、愛されていると実

感できる。

「ほどほどにな。明日の見合いに出るつもりだから」

「まさか、本当に婚約する気？」

「違う。徹底的にぶち壊して、二度と見合いさせようなんて思わな
いようにする。そのとき、僕たちの関係をばらしてもいいか……？」
「風の好きなようにして」

安心したように、和也が飛びついてきた。

凧は、これから訪れるであろう至福のときを予感して、うっとり
と息を吐いた。

目の前には、和装の少女とスーツ姿の婦人がいた。見合い相手の
石神井華恵とその伯母の石神井ふみ子だ。

華恵は清楚な美少女だった。日本人形のような。赤い着物は、華
やかすぎて似合っていないかった。

一方、ふみ子は華恵に似ているものの、小太りだった。真珠のネ
ックレスが、まるで首輪のように巻きついている。スーツもはちき
れんばかりだった。

凧はこっそりため息をついた。先ほどから、付き添いの由香里と
ふみ子が会話をしているのだ。

凧と華恵のことを話しているのに、当人は黙ったままだというの
は、おかしいのではないだろうか。それとも見合いとはこういうも
のなのだろうか。

ネクタイをはずして、窮屈なほど元をくつろげたかったが、仕方
なく凧は我慢した。それにしても、正座させられた足が痛い。

華恵と目があった。大変ですよね、と目で語りかけられているよ
うな気がして、凧は小さくうなずいた。

「そろそろ、若い人たちだけで」
「決まり文句が出た。」

「そうですね。凧さん、華恵さんと少し外をお散歩してきたらいかが？」

これは提案の形を取っているが、その実、命令だった。

和服に慣れないのか、華恵は歩きにくそうだった。凧は華恵にあわせて、ゆっくり歩く。

ホテルの庭の中でも、ここは和風にしつらえられている。つくりものめいた景観だったが、和風庭園というものはみな、こういうものかもしれない。

「あの……」

華恵がひかえめに声をかけてきた。

「なにか？」

凧は愛想を総動員して応じる。

華恵個人に恨みはないが、どうしても無愛想になってしまふ。凧は基本的に、女が苦手なのだ。

「実は、このお話、断っていたただきたいんですの」

「……どうしてですか？」

それは願ったり叶ったりだが、さすがにこううまい話にはわか信じられなかった。

華恵は困ったように眉を寄せ、口許に手をやる。

「わたくし、心に決めた方がおりますの。でも、父が、勝手にこの縁談を……」

どうやら、華恵も凧と同じ立場らしい。凧は少し同情した。

しかも、相手には男の恋人がいるのだ。凧以上に不幸かもしれない。

日陰に長いすが置いてあるのを見つけ、凧はそこに華恵を座らせた。

「実は僕もそうでしたね」

愛しているといわないで

「まあ……。では、断っていただけですか？」

華恵が顔を輝かせる。凧はかぶりを振った。凧とて、立場は華恵とそう変わらないのだ。

「やはり……。あなたと結婚、ということになるのでしょうか」

「そうならないように努力します。今日も少々、計画していることがありまして」

凧はにやりと笑んだ。

華恵がこの見合いに乗り気でないなら、計画は多分、うまくいくだろう。

凧は意気揚々と、華恵とともに会場へと戻った。華恵は凧の計画を聞くと、快く承諾してくれたのだ。

ほんの少しだけ、凧は華恵に好意を持った。

しつらえられた自分の席に戻り、凧はすました顔をする。華恵も、まるで何事もなかったかのようにすましていた。

「華恵、凧さんとお話してどうでした？」

ふみ子が問う。

「ええ、とてもいい方だと思いますわ」

打ち合わせどおりに華恵が答える。

「まあ、それはそれは……」

と、由香里をさえぎるようにして、戸が開いた。その場にいた全員の視線が戸口に集中する。

そこにいたのは、紺のスーツに身を包んだ和也だった。

凧は和也と視線を交わしあう。

「そちらはどなたですか？」

華恵が言った。演技とは思えないほど自然なせりふだった。

「恋人です」

凧と和也は、そろえて答える。

「まあ……。殿方かと思いましたが……。」

「いえ、生まれたときから男ですよ」

「あら、それはそれは。では、私、同性愛者の方を押しつけられるところでしたのね」

華恵は気分を害したふうでもない。微笑みながら和也を見ている。

「由香里さん、これはどういうことですか!？」

ふみ子は顔を真っ赤にしてわめいている。由香里はしどろもどろに言いわけをしようとしているようだった。

「このお話は破談ですわね」

「お幸せに」

凧は笑った。出血大サービスだ。

「そちらこそ、お幸せに」

華恵に目配せして立ち上がり、凧は和也の胸に飛び込んだ。

「ふみ子さん、華恵さん、有村家の長男は同性愛者だって広めてくださっても結構です。家を継ぐ意志がないことも!」

和也が茶目つ気たつぷりに宣言した。

「よろしいんですの?」

華恵は首を傾げる。

「僕たちは、ふたりでいらればそれでいい」

「幸せな恋をなさっておいでですね。承りましたわ」

穏やかに言葉を交わす若人の横では、由香里とふみ子が言い争っている。

ふたりはそれを尻目に、見合い会場をあとにした。

「どうしてこんなところに出たんだらう……」

和也はしきりに首をひねっている。すっかり迷ってしまったらしい。

適当にあるいていたら、いつのまにか、奥の方へと迷い込んでし

まったのだ。

ふたりは今、教会の前に来ていた。結婚式用の施設らしく、人気はない。ごぢんまりとした教会は、ひっそりとしていた。

「引き返すか？」

「ん……でも、今戻ると、有村家の人々とかがいそうだし……」

「ならここに隠れよう」

凧は教会の扉を指す。

「こんなところに？」

「ああ。まさか教会にいたとは誰も思わないだろう」

そんなことを言いながら、凧は、教会の内部を見てみたい などと思っていた。

凧はキリスト教徒ではないし、教会の中に入ることなど、結婚式以外ではないだろうから。

けれども凧は、結婚できないのだ。今の日本では認められていないために。

型にはまりたくない、という気持ちはある。けれどもそれ以上に、生涯をとにもする、という結びつきのようなものがほしかった。

凧たちの関係は禁忌だ。眉をひそめられることも多い。だからこそ、証がほしかった。和也を縛りつけておきたかった。

「そうだね、しばらくここにしようか？」

和也は、教会の扉に手をかけた。開くと、中は静謐で誇りくさい空気に満ちていた。

観音開きの扉を閉めて、ふたりは前を向く。

正面には祭壇があり、そこまで赤い絨毯が続いていた。バージンロードだ。

その両側には、木製の長いすが並んでいる。親族たちがかけるベキその場所には、今は誰もいなかった。

凧は和也と腕を組んで、祭壇の前まで行った。見上げると、きらびやかなステンドグラスが目に入った。

見とれていると、和也が覆いかぶさってきた。くちびるを奪われ

る。

凧はまぶたを下ろした。誓いの口づけのような気がして、少し、嬉しかった。

どういうわけか、考えがロマンチックな方へと傾く。非日常の場所を思考をも非日常に変えてしまうものらしい。

「好きだよ」

キスの合間に、和也が言う。

凧は和也の舌に噛みついてやった。和也が悲鳴を上げる。

「言うな」

本当にこりないやつだ、と凧は思う。いったい、何度言えばわかってももらえるのだろうか。

「あの……さ。前から気になってたんだけど、聞いてもいいかな？」
すぐに謝るだろうと思ったのに、和也は頭を下げなかった。真っ直ぐに凧の瞳を見すえている。

「どうして、好きだって言うのと嫌がるの？ 武藤さんが言ってたみたいに、俺のこと、嫌いなの？」

「違う……」

和也は今にも泣きそうな顔をしていた。やはり、わかっていない。和也は、なにも。

凧は和也が好きなのだ。好きで好きでたまらないのだ。

好きだ、としか言えないくらい、それほどまでに焦がれているのだ。

だから、そうは言わないのに。それなのに。

「どうして嫌なのか、それだけでも聞かせて」

真摯な双眸。和也は正面から、凧の心をあばいていく。いつも。けれどもそれは不快ではない。

「口にするたび、減っていくんだ」

母は、愛情が目減りしていくのに耐えられなくて、狂ってしまった。

そのときに、弟は凧をかばって死んだ。

なにもかも、悪いのは伸夫なのだ。伸夫のささやき続けた偽りの言葉のせいなのだ。

一度口に出してしまったら、いくら両手ですくおうとしても、指の隙間からこぼれ落ちていく。

それを知っていて、どうして口にすることができらるだろう。

「泣かないで……風。そんなに辛いなら、もう言わないから」

額と、鼻先と、くちびると、順にキスが落とされる。そのときにさわった和也の頬は、熱い。

いつのまにか流れた涙の通ったあとは、ほかよりいくぶん冷えていた。

「ああ……」

顔をのぞき込んでくる和也の目は優しい。きっと今度こそ、和也はわかってくれたに違いない。

キスをねだろうとしたそのときに、鐘の寝が鳴り響いた。チャペルの鐘だ。

普通なら鳴るはずのない鐘だというのに、それは止まることなく響いた。

風は目を閉じて、あごを心持ち上向ける。すぐに、羽毛のように軽く、和也が触れてきた。

鐘はまだやまない。

あれは結婚を祝う鐘の音なのだ。そしてこれは、誓いのキス。そんな冗談のようなことを、風は考えた。

誓いの言葉もなく、結婚するのは新郎新夫で、立会人は誰もいない。イレギュラーな式は、ふたりにふさわしいものに思えた。

これからもずっと一緒にいたい、と。

そんな思いを込めて、風は和也の背に手をやった。

今、世界にはふたりしかいなかった。世界はふたりだけのものだった。

愛しているといわないで

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2851c/>

愛しているといわないで

2009年3月24日09時51分発行